

宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の中の異質の挿入部分 「プリオシン海岸挿話」について

米地 文夫*

要旨 宮沢賢治の有名な物語「銀河鉄道の夜」は、銀河鉄道の旅の部分が幻想的であるが、中で異質で写実的な部分が「プリオシン海岸挿話」で、白鳥の停車場での停車時間中に主人公のジョバンニとカムパネルラが化石の発掘現場を見てくる話である。旅中で唯一の途中下車で、モデルとなった出来事や場所が特定でき、この挿話を含む章には「北の十字架」と「プリオシン海岸」という二つの異なるテーマが収められ、章題も不自然に長くなっている。少年たちの言動が他の部分に比し大人びている、など多くの点で異質である。それらのことから、この挿話は元来は夢の旅の原稿とは別に書かれた独立の短編がのちに「銀河鉄道の夜」の中に挿入された部分であることがわかった。

キーワード 宮沢賢治、「銀河鉄道の夜」、「プリオシン海岸挿話」、挿入部分、化石発掘

はじめに

宮沢賢治の最もよく知られている作品の一つ「銀河鉄道の夜」は、没後未完のまま残された原稿を編集し纏めて物語としたものである。この作品は、特にその中心を占める夢、すなわち銀河鉄道の旅の部分が幻想的で、限りない魅力と謎を秘めているため、そのイメージが現実の鉄道においても利用されてきた。例えば、銀河鉄道の一つのモデルとなった岩手軽便鉄道の後身であるJR釜石線は賢治も学んだエスペラント語のニックネームを各駅につけ、JR東北本線の在来線が民営化された際、盛岡以北の岩手県域分は「いわて銀河鉄道」という名称となった。また、今は廃線となった北海道のJR池北線（のち、ちほく高原鉄道）も「ふるさと銀河線」の愛称で知られていた。

「銀河鉄道の夜」は主人公のジョバンニ少年がケンタウル祭の晩、家に配達されなかつた牛乳を取りに行ったが入手できないまま丘に登り、そこで夢を見る物語である。その夢の中で銀河ステー

ション発の列車に乗り、いつの間にか乗車していく同級生カムパネルラとともに天上を旅する。他人に救命ボートの席を譲り難船の犠牲となつた人々が南十字で下車し、やがてカムパネルラも消え、最後に列車に一人残つたところで目覚めたジョバンニは、カムパネルラが川に落ちて行方不明になつていたことを知る。

死者を天上に運ぶ夢の葬送列車の悲哀感の漂う物語であるにもかかわらず、人々にロマンに満ちた作品として愛されている理由の一つは、この銀河鉄道の旅のなかに明るく楽しい挿話も入っているからで、なかでも旅の最初の方のプリオシン海岸挿話は、白鳥の停車場での20分間の停車中に途中下車したジョバンニたちが化石の発掘現場を見てくるという印象的なものであった。

「銀河鉄道の夜」の強い影響のもとに作られた松本零士のアニメ『銀河鉄道999』は、列車が停車する星ごとに主人公が途中下車し、さまざまな冒險をする物語で人気を集めた。

* ハーナムキヤ景観研究所 〒025-0063 岩手県花巻市小舟渡237-3 イギリス海岸ギャラリー内

賢治の「銀河鉄道の夜」の読者も、この次の途中下車ではどんな所でどんなことが起こるだろうという期待をもって読み進むはずである。しかしながら、その期待は裏切られ、その後は途中下車の場面がない。なぜその後は途中下車しないのか、あるいは逆になぜこの挿話の場合のみ途中下車したのか、を探ると、銀河鉄道の夢の場面の中でこのプリオシン海岸に関する部分は多くの点で異質であることがわかった。早くから入沢康夫はそのことに気付き、プリオシン海岸を含む第七章について「賢治のほかの作品との関連で多くの問題を含んでいるけれど、『銀河鉄道の夜』の他の部分のディテールと密接に結びついているところは少い。」と述べている（入沢・天沢、1979）。

筆者は、この部分（以下「プリオシン海岸挿話」と呼ぶ）が他の夢の旅の原稿とは別に書かれたもので、それがのちに「銀河鉄道の夜」の中に挿入された、と考える。

すなわち、銀河鉄道の旅の記述のなかで、プリオシン海岸挿話はその前後の文との繋がりが悪く、作品全体の記述と調和がとれていないなど、いわばすわりが悪いのである。検討の結果、プリオシン海岸挿話は、繰り返し改稿され、かつ未完に終わったこの作品「銀河鉄道の夜」の長い執筆過程の、かなり後の段階で挿入された部分であり、今は失われてしまった短編を改稿し「銀河鉄道の夜」に嵌めこんだものであることがわかったので報告する。

I 「銀河鉄道の夜」とプリオシン海岸挿話

1. プリオシン海岸挿話のモデル

幻想的な「銀河鉄道の夜」の中の挿話で、唯一、実際に賢治が体験したに基づくことが明らかで、しかも他の部分とは異質な、言い換えれば他の部分から乖離しているようにみえる写実的な挿話がプリオシン海岸に関する部分である。

このプリオシン海岸は賢治の短編「イギリス海岸」で知られる花巻市街地東縁の北上河畔、小舟渡付近の化石産地がモデルである。花巻農学校教師時代の賢治はその河岸の頁岩のベンチ状の岩場

でバタクルミの化石や偶蹄類の足跡化石を発見し、生徒と一緒に発掘なども試みていた。その話をまとめたものが1922年に書かれた作品「イギリス海岸」¹⁾である。賢治の当時の知見ではこれらの化石は新第三紀鮮新世（プリオシン）のものと考えられていた。しかしながら、近年の研究（大石、1995、大石ら、1997）によれば、この化石を含む地層は第四紀更新世（プライストシン）のものとみられるという。

1925年11月23日、賢治が案内して東北帝国大学理学部の早坂一郎助教授による化石の調査発掘が行われ、同博士によりのちに論文として発表された（早坂、1926）。プリオシン海岸挿話は「大学士」が行っており、その風貌からみても早坂助教授のこの時の化石発掘をモデルにしているとみられ²⁾、早坂氏自身もそう思っておられた（早坂、1975）。

賢治によるこの化石の発見や採集については、すでに小沢（1961）や宮城（1975、1977）をはじめ多くの著書・論説等があり、あらためて述べる要もない。しかし、一つだけ指摘しておきたいことは、賢治と農学校生徒による化石採集については短編「イギリス海岸」のほか〔或る農学生の日記〕と仮称されている作品や詩などに書かれているが、早坂助教授の調査発掘についての具体的直接的な作品化は、この「銀河鉄道の夜」のプリオシン海岸挿話以外にはないことである。

2. 「銀河鉄道の夜」のなかのプリオシン海岸挿話の位置

宮沢賢治が亡くなったとき、「銀河鉄道の夜」の原稿が枕頭に遺されていたという。その原稿はまとまったものではなく、数次にわたって改稿や取捨を重ねたものの、なおさらなる改訂や追加、あるいは削除を要するような統一性の欠けた未完のものであった。

賢治没後、これを一つの読み物として刊行するために、さまざまに編集されたが、現在の定説では原稿は、第一～三次稿の初期形と第四次稿すなわち後期形の四段階を経たと考えられており、最

後の第四次稿と呼ばれる形が一般に定稿に近いものとされている。プリオシン海岸挿話は第三次稿にその一部として登場し、第四次稿にもそのまま残っている。

第三～四次稿の構成は基本的には、地上、天上の夢、地上、の三つからなる。プリオシン海岸挿話の入っている天上の夢の内容は第四次稿では次のように構成されている。

- ①列車の旅のはじまり
- ②北十字
- ③プリオシン海岸
- ④鳥捕る人
- ⑤検札と切符
- ⑥難船した姉弟と青年の話
- ⑦車窓のさまざまな光景（信号手、とうもろこし畑、インデアン、発破など）
- ⑧サソリの話
- ⑨ケンタウルの村
- ⑩神様論議と南十字
- ⑪石炭袋とカムパネルラの消失

したがってプリオシン海岸の挿話は、種々の情景を見たり、さまざまなことが起こったりする天上の夢の旅のなかでは、きわめて早いうちに登場する。北十字でこの汽車が宗教的な雰囲気の世界を走ることを読者はまず感じる。ところが、そのすぐあとのプリオシン海岸挿話はこれとはがらりと趣が変わり、地上での学習に似た見学のための旅行のようにも見えてくる。しかし、続く不思議な鳥捕る人の登場と退場や、難船し救助される機会を他の人に譲って犠牲となった姉弟と青年の話などにより、この列車は再び幻想的宗教的な雰囲気に満ちてくるのである。

つまり、天上の列車の旅の中で③のプリオシン海岸はいわば異分子的な明るい話なのである。同様に明るいトーンの箇所は⑦の車窓のさまざまな光景と⑨のケンタウルの村であるが、前者は私（米地、2009b）が先駆形としたもので、本来、賢治は割愛したはずのものが混入している部分と考えられる。すなわち、第三次稿段階では削除されていたと考えられる（米地、2009b）ものである。

後者は賢治自身の手でそのほとんどが削除されており、少なくとも原稿一枚分は破棄されている。

したがって第四次稿（後期形）においては、③のプリオシン海岸の特異性のみが残ったのである。その特異性をより細かにみてみよう。

3. プリオシン海岸挿話のさまざまな特異性

このプリオシン海岸の挿話とその導入部は、前節で述べたように、ほとんど唯一の明るい写実的な挿話であるが、それ以外にも「銀河鉄道の夜」の、特に夢のなかの天上の旅の他の部分記述と較べると次のように多くの特異点がある。

- ①星座と無関係である
- ②宗教と無関係である
- ③天上らしくない
- ④プリオシン海岸という名は固有名詞としては不自然である
- ⑤地名や駅の表示を文字で読むという設定はここのみ
- ⑥乗客以外の登場人物がグループとして現れる（発掘の人々）のはこの挿話のみ
- ⑦この章の題のみが「北十字とプリオシン海岸」と二つのテーマを示している
- ⑧その二つのテーマのトーンが全く異なる
- ⑨白鳥の停車場は唯一の長い停車時間をもつ
- ⑩白鳥の停車場でのみジョバンニとカムパネルラが途中下車する
- ⑪白鳥の停車場で車室の他の乗客は一斉に降り、車室に戻った気配がない
- ⑫この駅着は十一時で、他の場面の第二時、第三時と第がつく呼び方とは異なる
- ⑬白鳥の停車場という名前であるのに白鳥そのものが登場しない
- ⑭長い停車時間をとる駅なのに、駅長も赤帽も、おそらくは駅員もいない
- ⑮駅舎の前に広場があるので、駅前や駅付近に全く建物がない
- ⑯白鳥そのものや白鳥座全体の形が物語に登場しない
- ⑰北十字とアルビレオ観測所という重要な場

所の付近には駅がない

⑯この星座の範囲のみ白鳥「区」という語が用いられている

⑰この星座には北十字、プリオシン海岸、アルビレオ観測所と挿話の数が多すぎる

⑱少年たちの言動が他の箇所とかなり異なる

これらの特異な点の多くは、この挿話およびその導入部がジョバンニの夢の他の部分とは異質であることを示しており、それらはこの挿話が「銀河鉄道の夜」へあとからいわば強引に挿入されたものであることにより生じた、という仮説が考えられるのである。なお白鳥座などの星座名は、現在は平仮名で書く慣習であり、はくちょう座とするべきであるが、本稿では賢治の用例に倣っておおむね漢字で表記する。

II プリオシン海岸挿話の始まり方

1. 挿話導入部分（第33葉原稿）について

「銀河鉄道の夜」は賢治の没後に原稿のまま残されていたもので、全部で83葉の原稿にはその後に番号を付して扱われている。プリオシン海岸挿話は第33葉の後半に始まる。

その第33葉は、北十字から列車が遠ざかり、やがて白鳥の停車場に着き、みんなが下車した、という内容であるが、その前半の11行までと後半の12行目以降との物語の内容には齟齬があり、無理に繋いだとしか思えない。

なぜなら前半は《旅人たちはしづかに席に戻り、二人も胸いっぱいのかなしみに似た新しい気持ちを、何氣なくちがった語で、そっと談し合ったのです。》という叙述で前半が終わり、後半はその二人の会話でこう始まる。《「もうぢき白鳥の停車場だねえ。」「あゝ、十一時かっきりには着くんだよ。」》これがどうして胸いっぱいのかなしみに似た新しい気持ちを抱いた会話なのであろうか。何氣なくちがった語で、というのが単に停車時間について語るということに当たるとも思えない。《新しい気持ちを、何氣なくちがった語で、そっと》話し合ったというからには、どんなことだろうと期待して読み進む読者を肩透かしにするよう

な素っ気ない会話である。

実は、先の《旅人たちはしづかに席に戻り、二人も胸いっぱいのかなしみに似た新しい気持ちを、何氣なくちがった語で、そっと談し合ったのです。》とある部分とその前の尼さんの描写などの6行ほどの下部には、斜めに鉛筆で斜線が引かれている。入沢（1997）はこの斜線を「ここを削除する意向とも思われない。」として無視し、『新校本宮沢賢治全集』では活かされているが、賢治は削除して不自然さを無くし、白鳥の島が見えなくなる箇所から「もうぢき白鳥の停車場だねえ。」という会話へと転換するつもりだったと考えるのが妥当である。

「もうぢき…」以下の会話も検討してみよう。二人が列車の十一時かっきりに着くことをどうして知っていたのであろうか。二人とも、あらかじめ、この列車に乗ることは予想していなかったはずであり、カムパネルラは銀河ステーションでもらったという地図は持っているものの時刻表まで持っているとは思えない。到着時刻がわかるぐらいなら、20分もの停車時間を置いての発車時刻もわかっているのが当然なのに、それが駅に着いてから、そこに出されていた表示でようやくジョバンニたちが知るのである。

北十字では「車室の旅人たち」は立ってつつましく祈り、そのあとは「旅人たちはしづかに席に戻り」、静謐な雰囲気に包まれて旅は続くと思わせる描写であったのに、白鳥の停車場では「みんなは、一ぺんに下りて、車室の中はがらんとなつてしまひました。」とある。敬虔な態度のカトリック風の尼さんも含めてあの静かな「旅人たち」が一ぺんに降りる、ということや、「旅人たち」といわず「みんな」と言い換えていることなどについては、二人以外の客が降りるのならば、かなり騒然としそうであるが、それがない。他の乗客はあらかじめ白鳥の停車場に降りることを予定してならば、それが何の目的なのか、彼らの目的地か一時停車で降りたのかは、全くわからないままなのである。

これらは白鳥の停車場のところにプリオシン海

岸挿話をあとからはめ込むために前の部分をかなり無理な設定としたため生じた不自然さなのである。

2. 十一時に白鳥の停車場に着くことの問題点

「銀河鉄道の夜」の後期稿（いわゆる第四次稿）すなはち今、読まれている物語では、銀河鉄道は白鳥の停車場に十一時に着く。一見、当たり前の時刻表示であり、特に変には思わず読み過ごしてしまうが、二つの点できわめて奇妙なのである。一つは銀河鉄道に乗る前のジョバンニの言動との関係からみた不自然さであり、他の一つは他の場面（物語の展開では後の場面になるが、執筆順では前に書かれている場面）における第二時、第三時という「第」がつく時間の呼び方と異なるという不自然さである。

この物語はジョバンニが、午後、学校で授業を受ける場面から始まる。放課後、彼は活版所で働くが六時過ぎに仕事を終え家に帰る。そして夕食をとり、母親の牛乳をとりに出掛けるが、そのとき一時間半で帰ってくると言い残す。しかし牛乳屋には係の人がおらず、少し経ってから来るようといわれ、天気輪の柱の丘で待つ間に、夢の銀河鉄道に乗るのである。この描写から、ジョバンニはおそらく七時ないしは七時半に家を出て、九時までには帰るつもりだったと思われる。夢の中で銀河鉄道が走りだして、地球が遠のくとそれを見てジョバンニは母親を思い出す。しかし家に帰るべき時刻を遙かに過ぎているのに、ジョバンニは慌てないし、困った様子もないのである。とはいえ、地上の時刻が天上にそのまま繋がるような十一時という時刻が使われていることは確かである。

ただし、天気輪の柱の丘から銀河鉄道が発車した時刻を八時半とすれば、停車場に着くまで二時間半もかかったことになり、物語の進み方からはそんなに時間がかかるとは思えない。実は、ジョバンニが活版所で六時過ぎまで働くことや、母親に一時間半で帰ってくると言うことは、

第四次稿において初めて書き加えられた部分に含まれるのである。それに対して十一時に白鳥の停車場に着くと書かれている部分は、より以前に書かれた第三次稿に含まれるとされている。したがって後から書かれた部分と合わないまま、原稿が遺されてしまったということであろう。

ところが、その第三次稿やそれ以前に書かれていた第二次稿の天上の時刻表記とも、この十一時という時刻表記は合わないのである。白鳥の停車場を過ぎた銀河鉄道が天上をさらに進む部分の原稿の各段階で描かれた時刻表記は、第二次稿では小さな停車場に着いた時刻が第二時、第三次稿にはその第二時はそのまま残り、さらに南十字に着く予定時刻として第三時が用いられている。天上の時刻に対しては既に第二時という特別な表記があり、それに合わせて第三次稿にも同じく天上の時刻として第三時という表記が使われている。この時刻の呼び方は、仏教でいう五時五味の譬えの第一時（華厳時）、第二時（阿含時）、第三時（方等時）、第四時（般若時）、第五時（法華時・涅槃時）の經典の違いないしは深まりの程度を説明する「教相判釈」（きょうそうはんじやく）からきており、その視点から第三次稿が書かれていた（米地、2009a）のである。にも拘わらず、同じ第三次稿とされてきた天上のプリオシン海岸挿話では十一時³⁾という普通の時刻が用いられている。

この前後の時刻表記と合わないということは、プリオシン海岸挿話が第三次稿と第四次稿との中に後で割り込んだこと、もともとは地上の出来事の原稿を天上での挿話として挿入したこと、によって生じた錯誤ないしは混乱なのである。

やや大胆に推理すれば、プリオシン海岸挿話を挿入する以前は、ここに第一時の時刻表記があつたのではないかと思われる。第一時は華厳時である。「銀河鉄道の夜」の天空のキリスト教的空間描写の、いわば仏教空間バージョンともいべき1924年7月の日付の詩群のうち「北いっぱいの星ぞらに」と始まる詩では、星空に華厳經で説かれた仏界のかたちを賢治は星空に探す。このプリオ

シン海岸挿話について入沢は華厳経との関連が考えられるという（入沢・天沢、1979）。賢治はおそらく白鳥の停車場への到着は第一時としていたのであろうが、第四次稿では教相判釈の考えは消すか薄めることとし、まずプリオシン海岸挿話では十一時という普通の時刻に変え、いずれは他の箇所の第二時、第三時も改めるつもりだったと考えられる。

3. 途中下車の機会や動機について

賢治はこの挿話を「銀河鉄道の夜」の中へあとになって挿入したために、いろいろな操作をした。その一つはプリオシン海岸へ行くことができるような機会を作ることであり、まず20分間という賢治の時代にても長い停車時間を設定した。機関車のつけ替えか客車や貨車の増結もしくは切り離し、あるいは単線における反対方向から来る列車との待ち合わせ、などの理由が考えられるが、この銀河鉄道は単線のようである。（しかも一方向にしか進まないようにもとれる会話の部分もある。）駅に「轉てつ機」があることにはなってはいるが、駅員がいないので停車時間に車両の交換や増減の操作を行うとは思えない。

この白鳥の停車場以外には、同じような長い停車時間がある駅は登場しない。そしてこの白鳥の停車場でジョバンニたち以外の乗客は全て下車したまま、車内には戻ってきた様子はない。そのため、カムパネルラと同じように地上から濡れたまま乗車するべき難船の犠牲者たちが、列車がこの停車場を発ち、かなり進んでから、走る列車内に突然出現し、犠牲者の女の子は「あら、こ、どこでせう…」云々と自分の身の瞬間移動に驚き、彼女たちの家庭教師も、当初は地上かと思い、のち「そら」へ来て天へ行くのだ、と気づくのである。そして彼らはやがて南十字で下車する。この銀河鉄道が南十字へ人々を運ぶのが目的の列車なら、なぜ白鳥の停車場でも下車する人たちがいたのかが疑問として残る。

この白鳥の停車場で「みんなは、一ぺんに下りて、車室の中はがらんとなってしまひました。」

とある。それでジョバンニたちもその皆につられて降りてみることにするのであるが、駅には誰もいないし、駅前の広場にもいない。「さきに降りた人たちは、もうどこへ行ったか一人も見えませんでした。」というのである。

ジョバンニたちは広場から延びる広い道を行き、河原に出る。ほかに道は無さそうで、一本道のように書かれており、そこにも人はいない。町はおろか駅以外に一つの建物もないらしいのである。しかし河原で砂をつまみ上げたり、渚で水に手を浸したりしたあと、川下の方に遠く五六人の人影を見つけ、二人は「行ってみよう。」と叫んで走ってゆく。その人たちも列車の乗客ではなく、化石を発掘する人たちであった。

乗客が皆、下車したのでジョバンニたちも降りるが、その降りた他の乗客は一体どこへ行ったのであろうか。ジョバンニたちも飛び降りて、銀河に沿って列車の来た方向に戻るのであるから、「旅人たち」が北十字に向かったならその姿が先に見えたはずなのである。しかし彼らの姿はすでに無いのに、ジョバンニたちはそれを不思議に思わず、このことについての話もしない。結局、ジョバンニたちが列車に戻っても、降りた乗客が列車に戻った気配はないのである。つまり乗客みんなが降りたというくだりは、ジョバンニたちを駅に降ろすための動機づけとして書き込まれたとか解しようがないのである。

このプリオシン海岸挿話が銀河鉄道の旅のはじめの方に組み込まれたのは、物語のなかで重要な役割をするような乗客がまだ乗ってこない段階だからであろう。それまでに乗っていた乗客は「ハルレヤ」を唱えるひだの長く垂れた着物を着た旅人たちやカトリック風の尼さん、などである。北の十字はどうに過ぎているのに、そちらへも行かずにどこに消えたのであろうか。幻想的な物語とはいえ、この挿話を入れるために、かなり無理な設定を賢治は用いたのである。

ジョバンニたちが下車してから発掘現場に着くまでには既に10分近い時間が経っているはずであり、発掘現場を眺めたり大学士の説明を聞いたり

するのに5分～10分はかかったであろう。そこで帰りは「一生けん命汽車におくれないやうに走りました。そしてほんたうに、風のやうに走れたのです。」とある。20分間という停車時間は化石発掘現場に往復するためのギリギリの時間として設定されているのである。

とにかくプリオシン海岸挿話を挿入するためには、20分間にジョバンニたちを下車させ発掘現場に立ち会わせ、また列車に戻らせなければならず、そのため、この二人を衝動的に同一の行動に駆り立て走らせる描写をしている。すなわち駅では「ぼくたちも降りて見やうか」「降りやう」と「二人は一度にはねあがってドアを飛び出して改札口へかけて行きました。」とある。河原に出て遠くに発掘現場が見えると「行ってみやう」と「二人は、まるで一度に叫んで、そっちの方へ走りました。」といふのである。帰りも「二人は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれないやうに走りました。」となる。

いわゆる後期形の原稿のうち、銀河鉄道に乗った夢の部分は約50枚の原稿用紙に書かれているが、ジョバンニとカムパネルラを「二人」と表記したのは27箇所である。そのうちプリオシン海岸挿話は僅か一割の5枚の原稿ではあるが「二人」と書いている箇所が計11箇所もある。ジョバンニの名は5箇所、カムパネルラの名は3箇所出てくるのみである。

プリオシン海岸挿話は後からの挿入なので、個人名はもともとジョバンニなどの名ではなかったこと、短い停車時間の設定に合わせて二人に迅速な同一行動をさせたこと、などが「二人」の語の多用の理由であろう。

4. 白鳥の停車場の付近にプリオシン海岸を置いた理由

プリオシン海岸挿話は白鳥の停車場で途中下車したことから始まる。既存の短編を挿入する場所として相応しいところと賢治が判断したからであろう。その理由は、物語の重要な脇役である銀河河畔で鳥を捕る鳥捕りや北の海で難船した姉弟と

家庭教師たちなどが乗り込んでくる前に入れたかったからであろう。彼らが白鳥の停車場到着以前に車内にいたのでは、全員が下車するということにならず、ジョバンニたちも下車しにくいのである。

また、鳥捕りの話は極めて幻想的であり、一方、プリオシン海岸挿話は実際に賢治が参加した化石採集の現場を扱ったものであるから写実的である。順序として写実的なものを先に置く方が良いと考えたのではないだろうか。また、この挿話の前では銀河の水は見えないが確かに流れている、とジョバンニたちは車窓から眺めて思っている。その銀河の見えない水がやはり水であることをジョバンニたちが手を浸して実感するというこの挿話が前に入ることによって、鳥捕りが銀河の河畔で仕事をすることがリアルになっている。この鳥捕りは、はくちょう座とわし座の間のこぎつね座の化身、すなわち正体はキツネである（米地、2008）から、やはりはくちょう座に挿入することになったのである。

要するに、プリオシン海岸挿話が、既に書かれていた夢の銀河鉄道の旅の記述に影響が及ばないようにするには、まだジョバンニたち二人以外の重要な登場人物が乗り込んでこない以前、すなわち乗車して間もない箇所しか挿入するところがなかったのである。

III プリオシン海岸挿話自体について

1. プリオシン海岸という地名について

このプリオシン海岸という地名にも問題が多い。全く星座とは無関係な内容であり、その名も天文とは無関係な地名なのである。イーハトヴの欧風の世界ではカタカナの架空地名、例えばモリーオとかポランなどが多出するが、「銀河鉄道の夜」には例外的にそれが少ない。ジョバンニの住む町の名も、カムパネルラが流された川の名もなく、地上の地名は、さそりの挿話のなかに「むかしバルドラの野原に」とあるのみである。これは乗客の女の子のお父さんが話してくれたことという設定であるから地上の地名らしいが、物語の本

筋とは関係がない。祭りの名がケンタウル祭であることのみがわかるが、この名が地名にちなむものではなく天上に関わるものと思われる。

天上の地名関連の名称には二種類あり、一つは天上で地上の実在の地名を想起するもので、青年が「あゝ、こゝはランカシャイアだ。いやコンネクテカット州だ。いや…そらへ来たのだ、天へ行くのです。」と言い、ジョバンニが「パシフィックといふのではなかったらうか。」とか「こゝはコロラドの高原ぢやなかつたらうか。」という類いである。

他のグループは星座、星などギリシャ神話にちなむもので、銀河ステーション、ケンタウルの村、鷺の停車場、サウザンクロスがある。はくちょう座に関わるものが中でも多く、白鳥の停車場、白鳥の島、白鳥区、アルビレオ観測所と、半数を占める。

このどちらにも属さないものが、はくちょう座のところに登場するプリオシン海岸であり、これは地上の地名とも星座ないしは星とも全く無関係な名称で、異分子というべきである。この名の類語としては賢治の詩「薤露青」に「プリオシンコースト」の語がある。詩の中で使われる場合は言い換えとして不自然ではないが、より論理的な散文の中では以下に述べるような問題がある。

入沢（1991）は自身の賢治研究に関わる多くの文章を編んで『宮沢賢治 プリオシン海岸からの報告』という魅力的なタイトルの500ページ近い大著を上梓している。ただし、肝心のプリオシン海岸についてはただ一カ所《「銀河鉄道の夜」の発想について》という13ページの文中に記載があるが、導入的に1回使われるのみで、その後はイギリス海岸の語のみが繰り返し20回以上使われている。

一般に賢治研究者や愛読者は「イギリス海岸」の名を好み、本来はただのニックネームであるはずなのに、あたかも賢治の命名によって正式に定着した名であるかのように用いられている。これに対して「プリオシン海岸」という名は、その「イギリス海岸」を呼ぶ洒落たニックネーム、雅

称のように受け取られることが多い。入沢（1991）の書名も『宮沢賢治 イギリス海岸からの報告』では花巻を訪れた際のルポルタージュと取られかねないし、やや手擦れした感を免れないと判断したからであろう。それは小沢（1961）が「イギリス海岸」について論じた際に「アルビヨンの夢と修羅の渚」という題とし、賢治の見立てのもととなつたイギリスの海岸を、賢治自身は使っていない地名のアルビヨンに置き換えたことと通ずる。

実は現存する地名から地質年代の名が付けられることはあっても、逆に地質年代の名から新たに地名が生まれるということは考えられない。なぜならば、既に地名があるところの地層や岩石が地質調査によって年代が推定されるのであるし、ある地質年代、例えばプリオシンの時代にも地球上の各地に海岸があったはずであるから一カ所をそれを冠した地名で呼ぶということはありえないのである。

しかし賢治にとっては「イギリス海岸」という名よりも「プリオシン海岸」の名が気に入っている、この名を使いたかったのではないだろうか。賢治は「イギリス海岸」という名は「わたしたち」が付けたと書いており、私が、とはいっていないからである（米地ら、1999）。「イギリス海岸」は賢治造語としてはやや陳腐とさえ言えるし、モデルのドーバー海峡の白い岩とは地質年代も大きく離れていることも意識していたことや、天上の地名であるから「イギリス海岸」という地上の名を避けて「プリオシン海岸」を用いたのである。

2. 地質年代や化石の不思議さ

天上帝るのに、この大学士の話に地層という言い方が出てくる。「銀河鉄道の夜」の夢のなかの旅のうち、この「プリオシン海岸挿話」以外の部分では、賢治は「地」という字のつく語をなるべく用いないように配慮しているようである。「地図」と「地平線」とが例外的に使われているが、地図は丸くて黒い星座早見盤を指すことが明らかであるし、地平線の方は「そらの野原の地平

線」で、地上のものではないことを示している。ところがプリオシン海岸には厚い地層があるとあり「天の」とか「そらの」という説明はない。

銀河鉄道の沿線に河原があり、その砂はしばしば登場するが、地下が地層や岩のような固結したもので出来ていることが書かれているのは、このプリオシン海岸のみである。

地球上の地質年代が天上においても使われており、見田（1991）はこれを「天空の地質学」と表現しているが、天上においても地球と同じに環境が変化し、地層ができたり、浸食作用が起こったりするのであろうか。百二十万年前とか第三紀などという用語は地球上においては意味をもつが、天上は地球の誕生とともに生まれた同じ齢なのであろうか。

この化石発掘をしていた大学士の話が、第三次稿にある黒い帽子の人が語る「地理と歴史の辞典」の話の「紀元前二千二百年」とか「紀元前千年」とかと対応すると考える人もいるが、これはジョバンニが学んでいる地球上の地理と歴史についての話であるらしく、天上の地理と歴史のことではないであろう。

天上の化石とは何であろうか、天上に昇っても化石として地下に埋もれるというのは、死んだ人々は天上に生きており、カムパネルラが「…みんな集まってるねえ。あすこがほんたうの天上なんだ あっあすこにゐるのぼくのお母さんだよ。」と言うことと矛盾する。一方、車窓に見たサソリの火は、サソリが自ら願って神に夜の闇を照らす天上の火に変えもらったものである。それに対して、ボスという原牛の場合は化石になって天上にあるというのは整合的でない。

幻想的な物語であるからこれらのこととも許容できるという意見もあるであろうが、賢治は科学と宗教との関係を深く考えており、安易に混同することはなかったし、彼の心象に映る、一見、幻想的に見える事象も、ある種の必然性をもって描かれている。それに対して、このプリオシン海岸挿話は、おそらくは後から組み込まれたことで起きた「すわりの悪さ」ないしは不自然さが随所に見

られるのである。

3. 白鳥の現れないことと「インドラの網」からの転用と

香取（1995）は、鳥捕りが白鷺を捕るのは、白鳥を白鷺に置き換えたのであると考えた。鳥捕りは自分の捕る鳥について「鶴や雁です。さぎも白鳥もです。」というのに、はくちょう座の付近で捕るのが白鷺なのは、渡り鳥としての白鳥の飛来する季節に合わないことと賢治が白鳥をそれほど良く知っていたからである、と説明する。では鳥捕りが持っていた雁の方は季節に合うのか、絵に頼って記載したと香取がカササギについて推定しているのであるから、白鳥も絵から描けるはずではないか、とか香取の論にも疑問が残るが、もっと別な視点からも見てみよう。

カムパネルラが「あ、しまった。ぼく、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれど構はない。もうぢき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を見るなら、ほんたうにすきだ。川の遠くを飛んでゐたって、ぼくはきっと見える。」と言う。第三次稿からあるこの言葉は、あの物語には繋がらない。もうぢき白鳥の停車場だから、というからには《停車場付近で白鳥が見られるであろう、白鳥の島の近くを通過して、少なくとも遠くを飛ぶのは見られるだろう》と読者に期待させておきながら、白鳥は姿をみせない。それならば、白鳥が見られなかつたことをカムパネルラが残念がるはずなのに、通過したあとも全く彼はそれを気にしていない。これは極めて不自然である。

したがって、当初の原稿には停車場付近で白鳥を見る場面があったか、白鳥が見えず残念がる場面があったのではなかろうか。夢の旅が白鳥座付近から始まることは、賢治の訪れたサハリンの栄浜北西にある白鳥湖と関わるのではないかと萩原（2000）や渡部（2001）など現地を訪れた論者は考えているようであるが、季節から見ても、また現地で書いた詩からみても賢治はサハリンで白鳥を見なかつたらしい。筆者（米地）も2009年に賢治が訪れたのと同じ季節に現地に行ったが、やは

り白鳥はいなかった。

星座が人や動物の姿で登場するのは、筆者（米地、2009b）のいう先駆形（0次稿）であり、白鳥の話もその先駆形のなかにあったものであろう。しかし、楽しい幼年童話的な先駆形から、悲哀に満ちた少年小説へ改稿してゆく過程で、より年長の人々を読者と想定した挿話であるプリオシン海岸の話が埋め込まれることになり、白鳥のシーンか白鳥は見えないと話す場面かが削除されたと推定される。

一方、ここへも他の作品から転用挿入された部分もある。前記の河原の礫が水晶や黄玉や鋼玉で、水晶の中に炎が燃えている、とあるのは短編「インドラの網」の描写とそっくりであり、このことは既に金子（1988）が指摘し、賢治は晩年に「インドラの網」の文章を再利用したのであろう、と言っている。

プリオシン海岸挿話は「インドラの網」の一部と、今は失われた化石発掘見学を描いた短編とを組み合わせて、あとから挿入したものと考えられるのである。

IV プリオシン海岸挿話が後の挿入であることを示す証左

1. 章題の長さと字配り

「銀河鉄道の夜」の現存原稿には、九つの章題がある。この章題は第三次稿段階でつけられたものとみられる。なぜなら、第一～第二次稿はすべて最後の「ジョバンニの切符」という章に入っているが、章分けされていない段階の原稿はすべて「ジョバンニの切符」の章題のあとにあり、全体の半ば近い分量になっているのである。つまり、第三次稿以後に原稿を章分けしようとしたわけであり、第一～第二次稿には章題はなかったことになる。

次に、各章題と原稿枚数および原稿の書かれた段階を揚げてみる。なお、章の番号のうち、賢治自身が章の番号を書いていないものは、その推定される番号を括弧に入れた。

一 午後の授業	4	第四次稿
(二) 活版所	3	第四次稿
三 家	3	第四次稿
(四) ケンタウル祭の夜	9	第三次稿 (第四次稿1枚を含む)
(五) 天気輪の柱	3	第三次稿
(六) 銀河ステーション	8	第三次稿
(七) 北十字とプリオシン海岸	8	第三次稿
(八) 鳥を捕る人	8	第三次稿
(九) ジョバンニの切符	37	第一～第四次稿 (削除さるべき重複分4枚を含む)

(九)の「ジョバンニの切符」は、おそらく細分されるべきものであろうから原稿枚数が多いが、他は3～9葉であり、(七)の「北十字とプリオシン海岸」の8葉も、長さとしては問題はない。しかし、章題の字数が11字と一番長く、しかも北十字「と」プリオシン海岸として、二つの主題が並列されているという点が他とは異なっている。

さらに他と異なるのは、原稿用紙に章題が記入されている位置、つまり原稿用紙の一行のなかの位置である。用紙は一行20字と25字との双方があるが、一行の中心の位置を揃え、賢治自筆の番号は入れて並べる。（「三、家」は実際の字配りに合わせてある。）

一、午後の授業
活版所
三、家
ケンタウル祭の夜
天気輪の柱
銀河ステーション
北十字とプリオシン海岸
鳥を捕る人
ジョバンニの切符

なお、この賢治自筆の番号は、第四次稿で物語のはじめに追加された三章のうちの二つのみに付

されている。「活版所」の章に番号が欠けている理由はさまざまに考えられるが、不詳というべきであろう。しかしながら、次のことは少なくとも言える。章分けは第三次稿からであり、章に番号を付けようとしたのは第四次稿からなのである。なお、賢治自筆の一と三の番号には、同じ升目に読点も付されている。

このように並べてみると、「北十字とプリオシン海岸」のみが右側、(縦書きの原稿用紙では下方)にずれていることがわかる。「一、午後の授業」「活版所」「三、家」の三章、すなわち第四次稿追加分を省き、第三次稿段階における章題部分のみを賢治自筆原稿そのままに並べてみると、図1のようになる。

もしプリオシン海岸部分が後から挿入されたもので、当初第三次稿では「北十字」だけの章題であったとするならばどうなるかを、「…プリオシン海岸」の部分を消去して図2に示した。同じ形を活字にすると下のようになる。

ケンタウル祭の夜

- 天気輪の柱
- 銀河ステーション
- 北十字
- 鳥を捕る人
- ジョバンニの切符

「北十字」だけの章題にした場合は他の章題の字配りと全く同じようにバランス良く位置しており、全く違和感がない。すなわち、もともとの章題は「北十字」だったのであり、のちに下方に「とプリオシン海岸」と追記した可能性が極めて高いのである。したがって、賢治が第三次稿として執筆はじめた時点では、「北十字」のみであったが、いったん第三次稿ができあがったあとにプリオシン海岸挿話が加えられたと考えられるのである。

このプリオシン海岸挿話は、白鳥の停車場についてから銀河に手を浸すまでの前半と、化石発掘現場以降の後半とからなり、前半は銀河鉄道の話

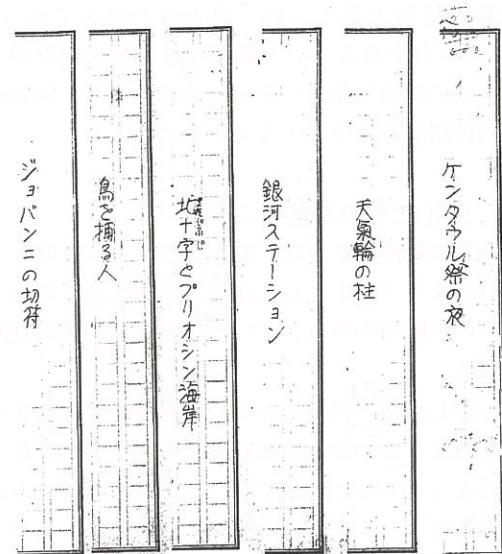


図1 「銀河鉄道の夜」第三次稿の章題（加筆後）

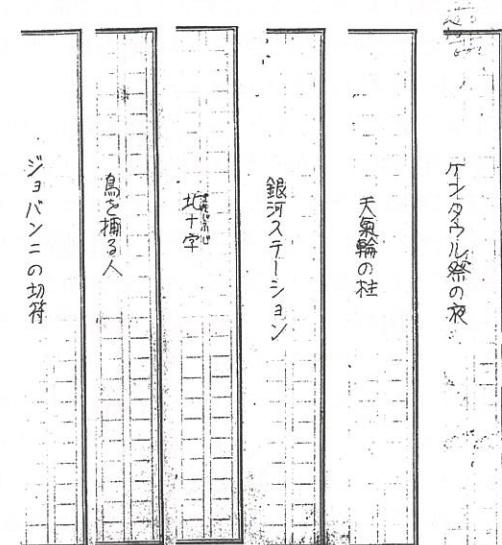


図2 「銀河鉄道の夜」第三次稿の章題（加筆前…推定）

に発掘現場を繋ぐために書かれた部分であり、「川の方をみると」と始まる後半の大部分がもともとの化石発掘見学をまとめた独立した短編からの転用部分であると考えられる。

2. 少年たちの言動について

「銀河鉄道の夜」の主人公ジョバンニと友人カムパネルラとはおそらく小学5年または6年生くらいの年齢であろう、というのがおおかたの見解である。

しかし銀河の河原でカムパネルラが手に砂をつまみあげ「この砂みんな石英だね。中で小さな火が燃えてゐるよ。」と言い、ジョバンニが「みんな水晶だよ。すきとほるんだよ。六方錐に結晶してゐるだらう。」と応じるのが当初の原稿であった。これを後で「この砂はみんな結晶だ。中で小さな火が燃えてゐる。」「さうだ。」という会話に変えている。石英、水晶、六方錐などの用語は小学生には難しいので、のちに修正したのである。

また、大学士の化石についての説明のレベルは、当時の中等学校以上の人に対する説明のようである。「第三紀」「ボス」などという用語も難しいが、「標本にするんですか」という問い合わせに「いや、証明するに要るんだ。」と大学士は答え、「ぼくらとちがったやつからみてもやっぱりこんな地層に見えるかどうか」などと語るが、それが証明ということとどう関わるのか大人の読者にも難解な言葉が続く。この「標本にするんですか」と「いや、証明するに要るんだ。」の二つの言葉は最初の原稿にはない。もとは大学士が「ぼくの考へてゐるのは…」と言っていた部分に置き換えたものである。この部分については、しばしば『春と修羅』の序との関係が論じられているので次節で比較をしてみよう。

また、カムパネルラは発掘現場の見学の終わりに、地図と腕時計とをくらべながら「もう時間だよ。行かう。」という。このころの日本の小学生は普通、腕時計は持たないし、カムパネルラは裕福な家の子どもではあるが、おそらく外国でも持たないであろう。

さて、時間がないので帰ることになったジョバンニは「ついに大学士におじぎ」してこういう。「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします。」この挨拶は小学生らしくない。他の箇所ではすべて「僕たち」といっているジョバンニが、ここでのみ「わたくしども」と言い、「失礼いたします」などという言い方をする。いくら大学士に敬意をはらい、ついに言ったとしても、小学生ジョバンニの言葉らしくないのである。他の箇所では目上の人と別れるときに母親には「では一時間半で帰ってくるよ。」と言い、牛乳屋の人には「さうですか。ではありがとうございます。」と挨拶し、第三次稿ではブルカニロ博士に「博士ありがとうございます。」と叫ぶ。大学士にも「ああ、では僕たちは帰ります。」という表現の程度が妥当だったはずである。

また大学士が説明のなかで「ぼくらとちがったやつからみても」と言っているが、教養のあるはずの大学士が小学生に話をするときに「やつ」などという言葉を使うだろうか。もしも大学士自身と年齢の近い学生に対してならば、学生言葉で「やつ」ということは有り得るであろう。

このようなことから、このプリオシン海岸挿話は小学生の見学ではなく、もともと中等学校生徒、具体的には賢治の勤めていた花巻農学校の生徒などを主人公とし、彼らの化石発掘見学を想定して書かれた短編を「銀河鉄道の夜」の中に転用したものであったと私は推定する。実際に賢治が案内した早坂助教授による現地調査の折には、農学校生徒数名も見学していたそうである。

賢治のいわゆる長編童話4作品、これは一般的の言い方でいえば、むしろ中編ではあるが、それらの創作には既存の短編を加除修正して挿入するという手法がよく採られている。例えば「ポラーノの広場」には短編「毒蛾」の一部が組み込まれているし、「風の又三郎」には「種山ヶ原」「さいかち淵」「台川」など多くの短編が形を変えて挿入されている。「グスコープドリの伝記」には「ペンネンネンネネムの伝記」の一部が加わっている。この「銀河鉄道の夜」でも「雙子の星」を取り込もうとして中断している。プリオシン海岸

挿話もまた、同種のものであったとみられるのである。

3. ジョバンニとカムパネルラのキャラクターの入れ替わり

プリオシン海岸挿話において、もう一つ、指摘しておきたい点は、この挿話の中ではジョバンニとカムパネルラのそれぞれのキャラクターが、互いに入れ替わったように描写されていることである。

「銀河鉄道の夜」では、主人公のジョバンニはいわば普通の少年であり、それに対して友人のカムパネルラは成績も良く人望もあり、級長をつとめている。したがって、二人の会話はジョバンニが年相応の素朴な質問や情緒的な感想を述べるのに対して、カムパネルラはその質問に応え、優等生らしい理知的な説明をする。ジョバンニは例えばこの挿話以前では、銀河鉄道はどこまで行くのか、何で動いているのか、飛び降りてリンドウを取りうか、という調子で質問したり、判断を求めたりし、そのたびにカムパネルラがそれに応じている。要するにジョバンニは子どもっぽく、カムパネルラは大人びているのである。

ところがプリオシン海岸挿話においては、質問するのはカムパネルラで、ジョバンニが答えていく。当初の原稿ではカムパネルラが砂をつまみ「この砂みんな石英だね。中で小さな火が燃えてゐるよ。」と言うのに対し、ジョバンニが「みんな水晶だよ。すきとほるんだよ。六方錐に結晶してゐるだらう。」と訂正し詳細に説明をしているのは前述した。また、カムパネルラが変なものがあると言うのに対し、ジョバンニが、それはクルミの実で岩の中にある、と説明する。

また発掘現場から立ち去るときの丁寧な挨拶「ていねいに大学士におじぎ」してこういう。「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします。」も、ジョバンニがする。

このように二人の少年のキャラクターが入れ替わっているのは、この挿話のみである。列車に戻ってからは、カムパネルラはまた知的で女の子と

もフランクに話せる積極性のある少年であり、これに対して主人公のジョバンニは引っ込みがちで鬱屈した気持の少年に戻るのである。

なぜプリオシン海岸挿話のみがジョバンニとカムパネルラとの会話が逆になるかについては、こう考えられる。もともとの独立した短編においては、主人公は知的で大人っぽい少年であり、連れがより素朴な少年であったとすれば、挿入された時点で、機械的に主人公をジョバンニとし、連れをカムパネルラとしたためにこの入れ替わりが生じたのではないであろうか。

V プリオシン海岸挿話追加の動機・目的

1. ボスという野牛の化石について

大学士が発掘して化石についてこう説明する。「…ボス〔と〕 いってね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居たさ。」

賢治たちは偶蹄類の足跡化石を発見し、短編「イギリス海岸」にもそう書かれている。早坂助教授の論文（1926）には「哺乳動物の足跡」があることが記され、のちに書かれた文章（1975）には「鹿の足跡と思われるくぼみ」が点在していたとある。

したがって、その偶蹄類を野牛とし、骨格の化石としたのは、賢治のフィクションである。なぜ牛の骨格としたかについては、例えば乳の河・銀河河畔であるから、とか牽牛伝説、あるいはおうし座と関連するか、などいろいろ指摘されているが、決め手はない。

垣井（2003）は、岩手県南の花泉から出た野牛の骨に触れ、戦後の学術調査で確認され、「賢治の鋭い推測か遊び心による単なる偶然かは判らないが、どちらにせよ花泉の獸骨遺跡の発見は、物語という形体を借りた賢治の仮説を、まさに証明したのである。」と記している。しかしながら、この化石発見は1927（昭和2）年で、旱魃に対処して井戸を掘った折に骨格が出土したという。昭和30年代に何度も学術調査があり、この金森遺跡の発見の経緯や発掘、化石や人工遺物などについては小野寺（2000）により簡潔的確にまとめられ

ている。実は筆者（米地）もその小野寺信吾⁴⁾氏（当時、一関一高教諭）が中心メンバーであった学術調査の一つに参加した。その際に聞き取りしたところでは、地元では牛の頭骨らしいとして当時、かなり話題となり、牛頭天王として祭ろうとしたりしたという。

その化石発見の三、四年後に賢治は東山の東北碎石工場技師として、比較的近い花泉（東山と花泉はともに現在は一関市域になっている）にも石灰粉末の売り込みを図っており、手帳には花泉の人名や薬工業組合の名も記されている。賢治は稻作に関わる冷害や旱魃への対応に腐心しており、かつては石灰粉末の売り込みのために販売エリアの状況について情報を得ようとしていたことは間違いない、もちろん古生物に強い関心をもっている彼が、花泉のこの牛骨の話題も耳にした可能性は高い。つまり推測でも偶然の一一致でもなく、賢治自身が聞いた話題を作品に取り入れたと思われる。とすれば、この化石の情報を賢治が得たこともまたプリオシン海岸挿話の挿入の動機の一つとなつた可能性がある。

2.『春と修羅』の序や第三次稿の「地理と歴史の辞典」の話との関係

『春と修羅』の序に次の文がある。

「(前略) おそらくこれから二千年もたつたころは／それ相当の地質学が流用され
相当した証拠もまた次々過去から現出し／みんなは二千年ぐらゐ前には
青ぞらいつぱいの無色な孔雀が居たとおもひ
新進の大学士たちは気圧のいちばんの上層
きらびやかな氷室素のあたりから／すてきな化石を発掘したり
あるいは白堊紀砂岩の層面に／透明な人間の巨大な足跡を
発見するかもしれません (後略)」

この文が「銀河鉄道の夜」のプリオシン海岸挿話と深い関わりがあるという見解はこれまで多く

く、両者の共通点についても再三、論じられてきた。しかしながら筆者は、敢えて違いを指摘してみたい。序の文の上掲の箇所は二分される。「おそらく」から「すてきな化石を発掘したり」までと「あるいは」以下である。前者は化石を発掘するのは気圧の最上層の氷室素とあり、無色の孔雀の化石らしいので、地層から原牛の化石を発掘するというプリオシン海岸挿話とは全く異なる幻想的な記述である。

したがってプリオシン海岸挿話は本来、科学的なルポルタージュであったが、「ぼくらとちがつたやつからみても」云々という語を加えて賢治独特の時空間の見方のものにしたと思われる。それによって単なるルポルタージュではなく、「銀河鉄道の夜」に相応しいものにしようとしたのである。

第三次稿では、夢の最後の方で黒い大きな帽子をかぶった大人が「地理と歴史の辞典」について話をする。この大人を「その学者」とも呼ぶ。その大人の話は難解である。なかでも「証拠」については、ある時代に証拠がぞくぞく出て、その時代には「本統」だとされたことが、次の時代には変わってくる、というのである。

この大人すなわち学者の言葉と対比されるのがプリオシン海岸で化石の発掘をしている大学士の解説である。ジョバンニが化石を「標本にするんですか。」と聞くと、彼は「いや、証明するに要るんだ。ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらゐ前にできたといふ証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがつたやつからみてもやっぱりこんな地層に見えるかどうか、あるひは風か水やがらんとした空かに見えやしないかといふことなのだ。」などと言う。化石の発掘の状況については地学的には問題はないが、この「ぼくらとちがつたやつからみても…」以下が問題でやや難解である。

しかしこの化石は何かを証明するためのものという地質学者の言であるから、素直に受け止めれば、化石は地層の年代や堆積環境を証明するものという意味であろう。とすれば「ぼくらとちがつ

たやつからみても…」というのは、同時代の他の地質学者ということになる。しかしそのあとに「ぼくらとちがったやつ」からみて地層に見えるか、それとも「風や水やがらんとした空かに見えやしないか」というのは、『春と修羅』の序の「青ぞらいっぱいの無色な孔雀が居たとおもひ／新進の大学士たちは気圧のいちばんの上層／きらびやかな氷室素のあたりから／すてきな化石を発掘…」云々と対応する。

初期形（第三次稿）には「黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の痩せた大人」が「地理と歴史の辞典」の話をする。そのなかで紀元前二千二百年前には証拠もあり本当と考えられていた地理と歴史が、あと、例えば紀元前千年になると変わっている、という。難解な言い方であるが、そのあとに「ぼくたちのからだだって考だって天の川だって汽車だって歴史だってたゞさう感じているのなんだから…」という。つまり発掘現場の大学士の話は現代では証拠もあり真実と考えられるが、「ぼくらとちがったやつ」すなわち賢治のような心象で世界を見る者からは別な風に見えるということであろう。とすれば、大学士の発掘は幻想に過ぎないかもしれないということになり、黒い帽子の大人の話の理解に役立つかもしれないが、読者にはますます難解になるばかりで、わざわざ後から追加してまで挿入するのはおかしいことになるのではないだろうか。

結論を述べれば、独立した短編であったプリオシン海岸の話を「銀河鉄道の夜」に填め込んだのは、第四次稿からは黒い帽子の大人もセロのやうな声もブルカニ口博士もすべて削除されることと対応しており、黒い帽子の大人の「地理と歴史の辞典」の話などの代わりにプリオシン海岸挿話が挿入されたのであった。

3. 原稿枚数計算メモによるプリオシン海岸挿話挿入時点の推定

プリオシン海岸挿話があとからの挿入か否かを原稿枚数から検討することができる。

賢治は初期形（第三次稿）の一枚目、自筆番号

1を記入した「ケンタウル祭の夜」の章の一枚目（後期形では11枚目に当たる）の欄外余白に鉛筆で下記の計算メモを付している。

25	72	12
24	600	33
—	—	—
100	43200	36
50		36
—		—
600		396

このメモは、第三次稿の作品冒頭の原稿用紙第11葉の欄外に賢治が記入した鉛筆書きのメモである。このメモは入沢（1977）の解説のとおり、まず第三次稿に用いた原稿用紙が25字の24行で六百字詰原稿用紙であることを確認し、次にこの原稿72枚で全体が何字になるかを計算している。さらにこれを印刷する場合の一ページ分が三番目の計算らしい。この段階では物語は原稿用紙72枚で纏まっていた。では現存する第三次稿原稿用紙と削除されたと思われる用紙との枚数をみて、初期形（第三次稿まで）の枚数を割り出してみよう。

先駆形・初期形原稿用紙	67枚
後期形原稿用紙	16枚
計（現存する原稿用紙）	83枚

後期形で削除されたと推定される原稿用紙は以下のように少なくとも8枚である。さきの72枚という数字が、入沢（1977）のいうように賢治が「この作品を本にする計画を練った」ものとすれば、原稿には今は欠落している8～10枚も計算に入っていたはずである。

第21葉と第22葉の間

5枚（賢治自筆番号11～15）

第59葉と第60葉の間

1～2枚（賛美歌の続き）

第69葉と第70葉の間

1～2枚（ケンタウルの村）

第78葉のあと

1枚（天気輪の柱の丘に戻る）

計（後期形からの欠落枚数）8～10枚

したがって初期形（第三次稿まで）の原稿枚数は現存の67枚に、おそらくは8～10枚を足した75～77枚であった。これは前記の計算メモの72枚より3～5枚多過ぎる。さらに第67葉の雙子の星の挿話が中途半端であるから、第68葉との間にもう1～2枚を加えたか、加えるつもりであったか、それも入れるべきかもしれない。したがって72枚を4～6枚超えるのである。しかし、この計算メモがプリオシン海岸挿話5枚を加える以前のものとすれば、矛盾しないのである。

このように、賢治の原稿枚数の計算の72枚を、これまで初期形（第三次稿）とみられていた原稿とのち削除された原稿との合計枚数からプリオシン海岸挿話を引いた枚数とすると、結局、プリオシン海岸挿話の挿入はいったん初期形（第三次稿）の原稿72枚が纏まったのち、初期形（第三次稿）と後期形（第四次稿）との中間で挿入されたと推定できる。

4. プリオシン海岸挿話挿入の目的

以上、プリオシン海岸挿話は「銀河鉄道の夜」の夢の旅のなかで極めて特異な挿話であり、あとから挿入されたものであるという見解を提示した。この賢治の思いつきは何から得たものかを考えてみよう。その鍵の一つは短編「イギリス海岸」の中にある発掘の様子の記述である。「…イギリス海岸のまん中で、みんなの一生けん命掘り取つてゐるのを見ますと、こんどはそこは英國でなく、イタリヤのポムペイの火山灰の中のやうに思はれるのでした。」とある。イタリア人らしい名前をもつ少年たちの訪れる場として、賢治にとってこの挿話の場所を思いついたのであろう。

このプリオシン海岸挿話をあとから加えた理由の他の一つは、賢治が内容を、より年長の読者向きにしたい、と考えたためである。この時期の賢

治は少年小説と称する、彼としては長編の物語を書くことに情熱を注いでいた。したがって、幼年童話的であった「銀河鉄道の夜」の少年小説化に際して、農学校生徒などの青少年向きに書き換え、別途に短編として独立していたプリオシン海岸挿話を加えた、と考えられる。

次に考えられることは、この挿話のモデルとなった東北帝大早坂助教授の小舟渡河畔における化石採集の話を何らかの形で遺したいという願いが、余命をも考えた病身の賢治の胸のうちに宿つたことも一因だったのではないだろうか、ということである。化石第一発見者として現場に早坂助教授を案内したことは、賢治にとっておそらく生涯のなかでも特筆されるべき大きな出来事であったからである。

「銀河鉄道の夜」のプリオシン海岸挿話として転用された、元の短編の原稿は戦災か何らかの原因でもはや失われている。したがって、賢治がこの「銀河鉄道の夜」に組み込んだものだけが後世に伝えられることになったのである。

賢治は彼の思いを伝えるためのメッセンジャー やプロンプターとして、第三次稿にブルカニロ博士、黒い大きな帽子の大 人、セロのやうな声、などを登場させた。しかしこのため、読者にとっては作品が複雑なラビリンスとなってしまったので、これらを削除し、その代わりにプリオシン海岸挿話を加え、発掘する大学士に「黒い大きな帽子の大 人」の言葉に似た難解な言葉も語らせたのである。その点からみれば、プリオシン海岸挿話は、これまで第三次稿に含められていたが、むしろ第四次稿への改稿を視野において挿入されたものであり、プレ第四次稿というべきで、これまでの現行区分の名称を踏襲するならば、第四次稿に入れるべきであろう⁵⁾。

前章で述べたプリオシン海岸挿話挿入の理由のほかに、さらにもう一つの理由として、賢治が「銀河鉄道の夜」第三次稿を一応書き上げてから、物語の舞台のモデルとして花巻をより明確に用いようと考えるようになったことが挙げられよう。自らの命の限界が迫っていることを自覚していた

賢治は、ジョバンニに自らの夢を託したのである。

プリオシン海岸挿話はまぎれもなく花巻の地の描写を天上へ持ち込むものである。その意図が類推できるものに、白鳥の停車場前の広場の状況の記載がある。「水晶細工のやうに見える銀杏の木に囲まれた、小さな広場」とあるが、植物に詳しい賢治にとってイチョウがきわめて東洋的な植物で、ヨーロッパでは珍しいものであることを知っていたはずである。江戸時代に蘭医ケンベルが送ったものが珍重されて植えたものの、西洋では普通は目にすることはない。ジョバンニたちがイタリアの少年であればイチョウを知らないであろう。しかし、イギリス海岸すなわちプリオシン海岸のモデル近くの軽便鉄道沿線には、小舟渡八幡神社の大きなイチョウの樹があり、賢治はおそらくこれからヒントを得て、あえて広場の光景にイチョウを書き込んだと思われる。

第三次稿をいったん書き上げたのちに、賢治はジョバンニの天上を旅する夢のなかに花巻小舟渡の化石発掘現場を挿入した。そして第四次稿には、地上の情景、すなわちジョバンニの住む街のたたずまいを花巻に似たものに書き換えたのである。彼の最後の作品は、こうして、彼が生まれ、育ち、働いた街花巻に捧げられるものになるはずであった。

おわりに

賢治の最後の作品となるはずだった「銀河鉄道の夜」はついに未完のままに終わった。しかしながら、幸いにも原稿は残され、その原稿から賢治の意図を類推することができる。その中で、「銀河鉄道の夜」の中のプリオシン海岸挿話は、主人公ジョバンニの夢の中の銀河鉄道の旅の中で、唯一の途中下車の話で、白鳥の停車場からプリオシン海岸の化石発掘を見学するという話であり、現実に賢治が同道案内した早坂助教授による化石採取の物語化であることが明らかであるものとして例外的な事例であること、などの特異点を中心に、原稿の内容の分析検討から、このプリオシン海岸挿話は、第三次稿が書かれてからの挿入部分で、

本来は単独の短編として書かれていた原稿を改編して、第四次稿に先立つ、いわばプレ原稿として挿入されたものであると推定できた。さらには賢治がこの作品に託した想いも読み取ることができたのである。それは彼の祈り、願い、幻想、知識、経験など多くのものを少年たちに伝えることであり、イーハトヴ花巻への愛をあらわすことでもあった。

賢治は地域の具体的な事象に幻想的なイメージを重ね多くの作品世界を創りだしたが、「銀河鉄道の夜」の夢の旅の部分は、天上を走る列車の話であるためそれらとは異なり、主として幻想的なイメージが続く。その中でプリオシン海岸挿話のみが、明らかに花巻に深く結び付く、地域的な性格を色濃くもつ例外的な部分であった。

この挿話部分を地域の活性化に結び付け、賢治の想いを我々が具体的に伝える具象化の試みが今、花巻で進められつつあり、その一環として木村清且氏らによる「白鳥の停車場」という観光スポットとなるべき小建築物の新設などが行われている。賢治のような広い分野に関わり、なおかつ地域の特性と深く結び付いている文学作品の研究は、多角的多面的に行うべきであるとともに、地域からのアプローチが重要であり、それらの研究の成果を地域のイメージつくりなどに反映させることができるのである。

【注】

- 1) 「イギリス海岸」原稿の末尾には（一九二三・八・九）と書き加えられているが、その時期に賢治はサハリン旅行中であり、かつ前の農学校校舎の位置で書かれているため、小沢（1961）は1923年ではなく、1922（大正11）年の作としている。
- 2) この大学士を賢治自身と考える意見（斎藤、1994）もあるが、言動、風貌などあらゆる点から見て早坂助教授であることは間違いない。なお、筆者（米地）は早坂氏にお会いしたことはないが、恩師の富田芳郎先生から台北帝大助教授時代の直属の上司であった早坂教授のことをうかがったことがあり、賢治の描写とよく合っている。桑原（1987）はこの大学士と助手は幽界人であるとするが、天上の世界に登場する人たちの中で、最も現実味のある登場人物を幽界人としてしまうと、この挿話のリアリティは失われるだろう。

- 3) この十一時という時刻は、有島武郎の小説『星座』に、主人公の札幌農学校の園という学生（武郎の分身の人物）が時計台に登り、その機械室で十一時の鐘が鳴るのを体験し、そのあまりの厳肅さに園は茫然とし「明治三十三年五月四日の午前十一時、——その時間は永劫の前にもなければ永劫の後にもない——が現れながら消へて行く…」云々と感じたという極めて印象的な記述がある。1920年前半、翌年後半発表のこの作品は賢治にとって特に関心を寄せた作家の作品で、しかも題名『星座』も、札幌農学校の生徒の物語という内容も賢治には魅力的で、かつ心中を遂げた武郎の最後の小説でもあり、賢治がこの小説を読み、時計台の場面から十一時という設定を考えたということも有り得るであろう。
- 4) 各調査報告書にその成果が記されているが、全容については小野寺（2000）がこの金森遺跡の発見の経緯や発掘、化石や人工遺物などについて記したもののが要を得たまとめになっている。
- 5) 「銀河鉄道の夜」の原稿は、初期形（第一～第三次稿）と後期形（第四次稿）とに四分割することが定説化していたが、米地（2009b）は先駆形（いわば0次稿）と初期形（第一～第三次稿）と後期形（第四次稿および第五次稿）と六分割することを提唱している。
- 従来第三次稿に含まれていたプリオシン海岸挿話をあとからの挿入部分として別にすると七分割することになるが、内容的には第四次稿に含めるのが妥当であろう。

【文献】

- 天沢退二郎（1977）宮沢賢治の彼方へ（増補改訂版）.思潮社.
- 入沢康雄（1991）宮沢賢治 プリオシン海岸からの報告.筑摩書房.
- 入沢康雄・天沢退二郎（1979）討議『銀河鉄道の夜』とは何か 新装改訂版.青土社.
- 大石雅之（1995）胆沢川河床の足跡化石の概要—宮沢賢治の「イギリス海岸」に関連して—.第24回ペドロジスト野外見学会資料.92-100.
- 大石雅之・吉田裕生・金光男（1998）北上川低地帯、和賀川、夏油川流域の鮮新・更新統.岩手県立博告書.14.5-20.
- 小沢俊郎（1961）アルビヨンの夢と修羅の渚—賢治地理「イギリス海岸」-.四次元.125.
- 小野寺信吾（2000）金森遺跡.岩手日報出版部.いわて未来への遺産 遺跡は語る 旧石器～古墳時代.6-8.
- 垣井由紀子（2003）「ボス」は本当にいた!.西田良子編.「銀河鉄道の夜」を読む.創元社.186.
- 香取直一（1995）「銀河鉄道の夜」なぜ白鳥（スワン）ではなくて白鷺なのか.宮沢賢治.13.2 14-220.
- 金子民雄（1988）宮沢賢治と西域幻想.白水社.
- 見田宗介（1991）宮沢賢治 存在の祭りの中へ.岩波書店.
- 斎藤純（1996）「銀河鉄道の夜」物語としての構造.洋々社.

- 萩原昌好（2000）宮沢賢治「銀河鉄道の夜」への旅.河出書房新社.
- 早坂一郎（1926）岩手県花巻町産胡桃に就いて.地学雑誌.38.55-65.
- 早坂一郎（1975）宮澤賢治との出会い.小沢俊郎編.賢治地理.98-105.学芸書林.
- 宮城一男（1975）農民の地学者・宮沢賢治.築地書館.
- 宮城一男（1977）宮沢賢治 地学と文学のはざま.玉川大学出版部.
- 米地文夫・平塚明・由井正敏・幸丸政明・豊島正幸（1999）“賢治たちのイギリス海岸”と野外 教室構想—岩手県域の地域環境計画に関する研究（第二報）-.総合政策.1.525-540.
- 米地文夫（2008）銀河鉄道の「鳥捕り」狐仮説からみた宮沢賢治の重層的世界. 総合政策.10.15-34.
- 米地文夫（2009a）宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の「乳」のモチーフと「五時五味」の譬え.地域文化研究所報告.10.58-101.
- 米地文夫（2009b）「銀河鉄道の夜」六分割論—「楽しき先駆形」と「ありうべかりし第五次稿」の識別—.宮沢賢治研究 Annual.19.157-168.
- 渡部芳紀（2001）サハリン探訪—宮沢賢治作品の舞台を探ねて—.国文学 解釈と鑑賞.66-68.180-200.

(2010年11月29日原稿提出)

(2011年3月29日受理)

The “Pliocene Coast” episode, an alien element in Kenji Miyazawa’s “*Night on the Milky Way Railroad*”

Fumio Yonechi

Abstract

“*Night on the Milky Way Railroad*” is one of Kenji Miyazawa’s most prominent works, and is a novella depicting a trip on the Milky Way Railroad, consisting mainly of fantastic dreams, but a realistic episode at the Pliocene Coast has a nature different to the other components of the novella. This episode describes a visit during a stop of the train at Swan Station by the hero Giovanni and his travelling companion Campanella to a site where scholars are excavating fossils. In many respects, it differs from other parts of the novella: this is the only stopover during the trip of dreams; the event and place after which the episode was modeled can be identified; the chapter that includes the episode has two different themes, Northern Cross and Pliocene Coast; its title is extraordinarily long; and in this episode, the behavior and conversations of the boys are more similar to those of adults compared with other parts of the novella. From these many differences, it can be concluded that the Pliocene Coast episode was a sketch that was originally written separately from the manuscript about the dream trip, and that it was inserted into “*Night on the Milky Way Railroad*” later—a reason for it being different from other parts of the novella.

Key words

Kenji Miyazawa, “Night on the Milky Way Railroad”, Pliocene Coast episode, alien element, excavating fossils